倉園好文著

新修 增鏡評釋

東京 國文書院版

昭和十二年二月十日印刷
昭和十二年二月十五日發行

版

著者検印

不許複製

新修増鏡評釋奥付

定價金貳圓參拾錢

著者　倉園好文
東京市日本橋區兩國四十四番地

發行者　湯淺茂
東京市神田區神保町三ノ廿三番地

印刷者　塚田十五郎

發行所　東京市日本橋區兩國四十四番地
國文書院

昭和十年十月一日印刷　昭和十年十月五日發行

新修 増鏡評釈

目次

序

一 清涼寺の涅槃會……二

二 老尼の參詣……三

三 老尼と筆者との會話……五

四 筆者老尼に昔物語を請ふ……八

五 老尼「彌世繼（いやよつぎ）」に次いで話を始む……一三

第一 おどろのした……一七

一 後鳥羽天皇の御誕生……一八

二 後鳥羽天皇の御即位……一九

三 後鳥羽天皇の御治世……二八

四 後鳥羽天皇の御讓位……三三

五 水無瀨の御殿（ごてん）……三四

六 土御門天皇……三九

七 「新古今集」の勅撰……四一

八 千五百番の歌合と宮内卿……四六

九 新古今集の竟宴……五六

十 土御門天皇の御讓位と順德天皇の御即位……五九

十一 順德天皇の御文事と懷成親王……六三

十二 後鳥羽上皇の御遊……六七

十三 淸撰の御歌合……七五

十四 慈圓僧正の歌……八一

十五 定家の返歌……九一

十六 土御門上皇の御歌……九八

第二 新島もり……一〇一

一 武士の勃興―平氏の源流……一〇三

二 源氏の勃興……一〇四

三 源 賴朝……一〇七

四 源 賴家……一一五

五 源實朝……一一八
六 藤原氏の將軍、北條氏政權を握る……一二四
七 幕府討伐の御計畫……一二七
八 永久の亂起る……一三〇
九 北條義時同泰時等の覺悟……一三三
十 京都方の軍備……一三八
十一 戰の經過……一四五
十二 後鳥羽法皇隱岐へ遷り給ふ……一五〇
十三 順德上皇の遷幸と仲恭天皇の御退位……一五二
十四 土御門上皇の遷幸……一五三
十五 承久の亂を評す……一五六
十六 後鳥羽法皇論……一六〇
十七 隱岐の法皇……一六四
第三 ふぢ衣……一七六
一 守貞親王……一七六
二 後堀河天皇……一八〇
三 仲恭天皇と御母君(東一條院)……一八二
四 後堀河天皇の后妃……一八六
五 藤原(九條)道家の榮華……一九〇
六 土御門法皇の崩御……一九二
七 新勅撰集……一九五
八 後堀河天皇の御讓位と四條天皇の御即位……一九七
九 中宮竴子の薨……一九九
十 仲恭天皇の崩御……二〇四
十一 後堀河上皇の崩御……二〇五
十二 攝政敎實の薨……二〇七
十三 後鳥羽法皇の御晩年―遠島御歌合……二〇九
十四 後鳥羽法皇の崩御……二一七
第四 三神山(みかみやま)……二二一
一 土御門上皇の皇子……二二一
二 四條天皇の御元服……二二五
三 石淸水八幡の神託……二二六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

四 四條天皇の崩御 …………二二九
五 皇位繼承の問題—後嵯峨天皇の御踐祚 …二三三
六 四條天皇は泉涌寺開山の生れがはり …二四〇
七 後嵯峨天皇の御即位 …………二四三
第五 內野の雪 …………二四七
一 西園寺 …………二四七
二 順德天皇の崩御 …………二五四
三 內の最勝講と前內大臣御八講 …………二五五
四 中宮姞子の御產 …………二五九
五 皇子(久仁親王)の御養產 …………二六九
六 承明門院の御幸 …………二七六
七 兵衛內侍腹の若宮(宗尊親王)の御五十日 二七八
八 久仁皇子の親王宣下 …………二七九
九 久仁親王の立太子と實氏の榮華 …………二八一
十 土御門院の御十三回忌 …………二八四
十一 石淸水八幡宮の行幸 …………二八五
十二 賀茂の社へ行幸 …………二八八
十三 仁和寺の法助の灌頂 …………二九一
十四 賴經の歸京と賴嗣の將軍宣下 …………二九六
十五 道家一門の榮華(兄弟三人攝政に任ぜらる) …………二九八
十六 太政大臣實氏 …………三〇一
十七 後嵯峨上皇 …………三〇四
第六 烟の末々 …………三一一
一 後嵯峨上皇の宇治御幸 …………三一一
二 內膳屋の火事—三箇の寶の釜 …………三一三
三 宗尊親王の御書始 …………三一四
四 寶治三年の院の拜禮と小朝拜及御幸始 …三一六
五 圓助法親王、附省仁親王 …………三二三
六 內裏炎上及び京都の大火 …………三二五
七 後嵯峨上皇の鳥羽院御幸 …………三二八
八 後嵯峨上皇吹田の山庄へ御幸 …………三三〇

九　後深草天皇の御遊戲……三五四
十　端午の節句……三五七
十一　後嵯峨上皇住吉へ御幸……三五九
十二　宗尊親王、鎌倉の將軍に任ぜられ給ふ……三六〇
十三　後深草天皇の御元服（附）御病氣平癒……三六五
十四　後深草天皇の朝覲の行幸……三六六
十五　後嵯峨上皇の熊野御幸……三六八

第七　おりゐる雲……三七二

一　東二條院公子の入内、立后……三七二
二　實氏の榮華……三八二
三　承明門院の薨と恒仁親王の立太子……三八四
四　後嵯峨上皇の高野御幸
　（附）土御門顯定の事……三八五
五　後嵯峨上皇の御遊樂……三九〇
六　龜山の山莊と淨金剛院……三九二
七　大宮院の一切經供養……三九四
八　後深草天皇の御讓位……三九九

第八　山のもみぢ葉……四〇二

一　後深草上皇（附實）氏の剃髮……四〇二
二　實雄の女佶子の入内（附）公宗……四〇三
三　公相の女嬉子の入内……四一三
四　龜山天皇の龜山殿行幸……四一五
五　後嵯峨上皇の如法經供養……四一八
六　龜山殿の御歌合……四二〇
七　「續古今集」の撰進……四二四

第九　北野の雪……四二七

一　蓮華王院の供養……四二七
二　將軍宗尊親王の御退職と惟康將軍の御執任……四三一
三　後歸京後の宗尊親王……四三五
四　涅槃會、御八講等法會相繼いで行はる……四三八

五　後嵯峨上皇の御寫經とその供養會……四四一
六　齊宮愷子……四四五
七　兩上皇、女院等、日野の山莊へ御幸……四四七
八　安嘉門院の御有樣……四四九
九　西園寺公相の述懷……四五〇
十　文永の大風……四五三
十一　西園寺公相の薨……四五四
十二　皇后佶子の御產……四五七
十三　深心院關白……四六一

第十　あすか川……四六三

一　世仁親王の五十日の御養產
　（附）冷泉院の御舞……四六四
二　後嵯峨上皇、五十の御賀の試樂……四六四
三　富小路殿の舞……四七四
四　蒙古襲來……四七九
五　世仁親王の立太子（附）西園寺の中宮……四八〇
六　後嵯峨上皇御落飾の御志—白河殿の御歌合……四八一
七　嵯峨上皇の御剃髮……四八三
八　後嵯峨法皇の御逆修……四八五
九　月華門院の薨……四八六
十　後嵯峨法皇の宸筆法華經の供養……四八八
十一　後嵯峨法皇と御深草上皇との御方分……四九〇
十二　東二條院の御產……四九四
十三　後嵯峨法皇の御不豫—崩御……五〇一
十四　大宮院の御落飾……五〇六
十五　經任と公雄……五〇七
十六　公宗、皇后佶子、及び實雄の薨……五一一
十七　後深草上皇と龜山天皇の御不和……五一三
十八　龜山天皇の御親政……五一七
十九　春宮世仁親王の御病氣……五一九
二十　內裏炎上……五二三
二十一　龜山天皇御讓位の思召……五二六

第十一　草まくら……五二七
一　龜山天皇の御讓位と後宇多天皇の御踐祚　五二八
二　龜山上皇の御幸始……五三〇
三　後嵯峨法皇の御三年忌……五三一
四　後宇多天皇の御即位(附)龜山天皇の院政…五三三
五　後深草上皇の御不滿……五三五
六　兩上皇の御不和についての幕府の對策
(附)時賴と時宗……五三七
七　兩統迭立……五四二
八　齊宮愷子の御歸京……五四五
九　愷子内親王をめぐる人々(龜山上皇、西園寺實兼二條師忠)……五四六
十　新陽明門院と啓仁親王……五七〇
第十二　老のなみ……五七二
一　後宇多天皇の御元服……五七三
二　龜山殿へ朝覲の行幸……五七三
三　東宮凞仁親王の御元服……五七五
四　龜山上皇の後宮……五七六
五　二條の内裏炎上……五七八
六　龜山上皇の御素行(五條院その他)……五七八
七　後宇多天皇いまだ女御おはせられず
(附)今出川院……五八六
八　龜山上皇、持明院へ花見に御幸……五八七
九　長講堂の再建落成(附)供花會……五九一
十　後深草、龜山兩上皇の御紅葉狩……五九五
十一　續拾遺集の勅撰……六〇〇
十二　繼仁親王……六〇一
十三　後嵯峨上皇の皇女薨ず……六〇四

上卷　目次　終り

新修 増鏡評釋

倉園妙文著

序

(要旨) 或人(筆者)が嵯峨の清涼寺の涅槃會(二月十五日に行はれる)に參詣すると、八十以上かと思はれる老尼に遇うた。老尼に年を問ふと、百歳を遙に越えてゐると言ふ。此のやうな老人こそは、遠い昔の事も見聞してゐるだらうと思つて、昔の話をしてくれと懇請する。假名文の歷史書には、大鏡・今鏡・水鏡・世繼(榮華物語)彌世繼(今は傳はつてゐない)等があつて、神武天皇の御代から後鳥羽天皇の御代まで記されてゐるので、老尼は其の次の時代から話を始める事にする。(但し、實際は後鳥羽天皇から始めてゐる。)なほ序文の終りにある老尼と筆者の唱和の歌に「増鏡」と云ふ語がある。其を取つて此の書の題にしたのである。

一　清涼寺の涅槃會

二月の中の五日は、鶴の林に薪盡きにし日なれば、かの如來二傳の御かたみのむつまじさに、嵯峨の清涼寺に詣でて、「常在靈鷲山」など心の中に唱へて拜み奉る。

通釋　二月十五日は、(釋迦如來が)娑羅樹林でおかくれになつた日であるから、あの印度から支那へ、支那から日本へと傳はつた釋尊の御像が慕はしいので(禮拜し度いので)嵯峨の清涼寺に參詣して、「常在靈鷲山」(お釋迦樣は實際はお亡くなりにならず、永遠に靈鷲山においでになる)等と云ふお經の文を心の中で唱へて(お釋迦樣の像を)拜み申上げる。

語解　○きさらぎ　二月。○中の五日　中旬の第五日。十五日。○鶴の林　お釋迦樣がお亡くなりになつた場所で印度の拘尸那城 kusinagara の娑羅と云ふ木の生えてゐる林を指す。お釋迦樣が亡くなられると、天地皆悲しみ、娑羅の林の色が變つて白い鶴のやうになつた。この故事に依つて其の娑羅の林を「鶴の林」又は「鶴林」と云ふ。○薪盡きにし日　お釋迦樣が亡くなられた日。「法華經」にお釋迦樣の亡くなられるのを形容して「薪盡きて火の滅するが如し」とあるのに依つて出來た語。○如來二傳の御かたみ　再傳の如來の御像。如來は佛。二傳は印度から支那に傳はり(一傳)、支那から日本に傳はつた(二傳)の意。釋尊がお亡くなりになつた時、拔嗟國王の優塡大王が大いに悲しんで旃檀香木で釋尊の肖像を造り奉つたが、其の像が東晉の孝武帝の時に支那に傳はり、更に日本の僧奝然が永觀元年に宋に行つて、此の像を得て日本に歸つた。其が清涼寺に安置せられてゐる釋迦像であると云ふ(「元亨釋書」、「清涼寺緣起」等)。この像は現在「國寶」になつてゐる。○嵯峨の清涼寺　今の京都市右京區上嵯峨町にある。○詣でて　お參りして。○常在靈鷲山　釋

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

尊は、永遠に靈鷲山に居られる。（人を導く爲に、假に亡くなられたやうに見せられたので、實際は亡くなられたのではない）。靈鷲山は耆闍崛山の譯語で、印度の摩揭陀國の王舍城（釋尊の生れられた處）の東北にある山で、釋尊は此の山で多く說法をせられた。今チヤタ Chata 山と云ふ。「常在靈鷲山」は「法華經」壽量品の語で、「衆生を度せんが爲の故に、方便して涅槃を現す、而も實には滅度せず（中略）、常に靈鷲山及び餘の諸の住處に在り（下略）」とある。

參考 ○**かたみ** 亡き人又は別かれた人を思ひ出す記念の品。（もう少し廣い意味に解して「春の形見」、「花の形見」等と、或るものを思ひ出す種の意にも用ゐる。）○**むつまじさに** 「むつまじ」は親しい、仲がよいと云ふ意の形容詞。「むつまじさ」と接尾語の「さ」が加はると親密、愛慕と云ふ意の名詞に變化する。名詞に接續する助詞の「に」は添加、並列、標準、目的、原因、結果、場所、方向等種々の意味を表はすが、此處は原因（理由）を示す。（睦しいので、睦しい爲にの意。）「清涼寺に」の「に」は方向を示し、「心の中に」の「に」は場所を示す。因に云ふ「薪盡きにし」の「に」は完了の助動詞「ぬ」（な、に、ぬ、ぬる、ぬれ、ね、と活用する）の連用形で、助詞ではない。

二　老尼の參詣

傍に八十にもや餘りぬらむと見ゆる尼ひとり、鳩の杖にかゝりて參れり。とばかりありて、「たけく思ひたちつれど、いと腰いたくて堪へがたし。今宵はこの局にうち休みなむ。坊へ行きて、御燈の事など言へ。」とて、具したる若き女房のつきぐ\しき程なるをば返しぬめり。

通釋 （自分の）そばに、もう八十以上になつたであらうかと思はれる尼さんが一人、鳩の杖を力に參詣して來た。暫くして、（尼）「氣強く（參詣しようと）思ひ立つたけれど、大變に腰が痛くて我慢が出來ません。（とても歸れませんから）今晩は此の部屋で宿りませう。坊さんの居る所へ行つて、燈火の事など言ひなさい。」と云つて、つれてゐた若いお供の女の、この尼さんのお供として似合はしい様なのを返してやつたやうである。

語解 ○鳩の杖　老人の持つ杖で、上の方に鳩の形が彫刻してある。此は支那の風習を眞似たもの。（「後漢書」の禮儀志に民の年始めて七十の者に、之に授くるに玉杖を以てす。（中略）端に鳩鳥を以て飾と爲す。鳩は噎ばざるの鳥也。老人の噎ばざるを欲するなり。」）○とばかりありて　暫くして。○たけく　氣強く。心丈夫に。○思ひ立ちつれど　思ひ立つたけれど。「思ひ立つ」は或る事を爲さうと心に定める。「つれ」は完了の助動詞「つ」の已然形。○いと腰いたくて　腰が大變に痛くて。「いと」は「いたく」に係る副詞。○局　部屋。○うち休みなむ　休みませう。「うち」は意味を強める接頭語。「なむ」は未來を表はす助動詞。○坊　僧侶の住所。坊舍。○御燈　ともし火。（室内にともす火）。○具す　ともなふ。連れる。○女房　侍女。○返しぬめり　返へしたやうだ。返へしたらしい。「ぬ」は完了を現はす助動詞。「めり」は推量を現はす助動詞。

參考 ○**とばかり**　右の「とばかり」は副詞で、少時、暫時の意であるが、「百人一首」の「今はたゞ思ひ絶えなんとばかりを、人傳ならで言ふよしもがな」の如き「とばかり」は接續詞で、「……と云ふことだけ」の意で、意味が全く違ふ。○**局**　「つぼね」（つぼめ圍ふ）と云ふ動詞の連用形から名詞になつた語で、四方を取り圍うた所、即ち部屋と云ふ意。（壺、蕾等と同じ系統の語である。）○**坊**　房と通じ、部屋と云ふ意であるが、特に僧侶の居所、「僧房」を云ふ。（坊に住んで居る人を「坊さん」と云ひ、坊の主人を「坊主」と云ふ。）又皇太子殿下に關する一切の事務を掌る役所を「東宮坊」

と云ひ、轉じて皇太子を「坊」と申上げる事がある。○**女房**　房は上記の如く部屋の意。宮中等に仕へる女で、自分だけの部屋を賜はつて居る者。即ち身分の高い女官の事であるが、轉じて貴人に仕へる女をも云ふ。（妻の意味に用ゐるのは、侍女の意味から更に轉訛したもの。）○**つきぐし**　「似合はしい」、「似つかはしい」の意の形容詞。

三　老尼と筆者との會話

「釋迦牟尼佛」と度々申して、夕日の花やかにさし入りたるをうち見やりて、「あはれにも山の端近く傾きぬめる日影かな。わが身の上の心地こそすれ。」とて、寄り居たる氣色、何となくなまめかしく、心あらむかしと見ゆれば、近くよりて、「何處よりまうで給へるぞ。ありつる人の歸り來む程、御伽せむはいかゞ。」など言へば、「此のわたり近く侍れど、年のつもりにや、いと遙けき心地し侍る。あはれになむ。」と言ふ。「さても何歳にかなり給ふらむ。」と問へば「いさ、よくも我ながら思ひ給へわかれぬ程になむ。百歳にもこよなく餘り侍りぬらむ。來し方ゆく先、例も有り難かりし世の騒にも、この御寺ばかり恙なくおはします。なほ、やむごとなき如來の御光なりかし。」など言ふも、古代にみやびやかなり。

通釋（尼は）「釋迦牟尼佛・釋迦牟尼佛」と、度々稱へて、夕日が美しく（御堂の中へ）さし込んだのを眺めて、（尼）「まあ、

山の端に近く傾いたらしい日ざしですこと。(餘命何程もない――齢の傾いた――)私の身の上のやうな感がしますよ。」と(獨言を)言つて、物に寄り添うてゐる樣子が、何となく上品で、ものの心得もあるらしいと見受けられるので、(筆者は)近く寄つて、「どちらから御參詣なさいました。以前の方(若き女房)が歸つて來られるまでの間、お話相手を致しませう如何です。」などと言ふと、(尼)「(私は)この近所の者で御座いますけれど、年を取つた爲でせうか、大變に遠くへ來たやうな氣がいたします。なさけない事で御座います。」と言ふ。(筆者)「さてまあ、おいくつに成りなさつたのでせうか。」と問ふと、(尼)「さあ、自分ながらよくも辨へられない程で御座います。百歳よりも、ずつと超えた事でせうよ。今までにも此から後にも、殆ど例も無かつた戰亂にも、この御寺(淸涼寺)だけ無事でいらつしやいます。やはり此の上もなく尊い佛の御威光で御座いますよ。」などと言ふのも、昔風で優美である。

語解　○釋迦牟尼佛　お釋迦樣の名。佛に禮拜する時には、佛の御名を稱へて、佛に對する歸依を表はす。(釋迦牟尼佛の釋迦はシヤークヤ Sakya で、印度の一種族の名。牟尼はムニ Muni で寂默、智者の意。佛は佛陀、ブツドハ Buddha の音譯で、最高の悟を開かれた方の意。即ち釋迦族の智者で最高窮極の悟を開かれた方と云ふ意。)○花やか　美しく(きら〱しい美しさ。)○うち見やる　眺める。「うち」は語調を強める接頭語。「見やる」は遠くを見る。眺める。○山の端　山のはし。山の限界。麓から見れば山の上の方が端。○日影　日の光。○寄り居る　ものに寄り添うて居る。○氣色　樣子。有樣。○なまめかしく　上品に。奥ゆかしく。○心あらむかし　「心あり」は理解がある、趣がある。「かし」は輕い詠嘆の意を現はす助詞。○ありつる人　以前の人。前に居た人。(「つる」は完了の助動詞「つ」の連體形である)○御伽　話の相手になつて徒然を慰める事。○このわたり　此の附近。「わたり」は「あたり」。○思ひ給へわかれぬ　思ひ分ける事が出來ぬ。辨へられぬ。○こよなく　此の上なく。大層に。○來し方　過ぎて來た方。過去。○ゆく先

將來。未來。○ためし　例。○有り難かりし　殆ど無かつた。「有り難し」は有る事が難い。殆ど無い。滅多に無い。「有り難かりし」と過去にしてあるのは「來し方」に對應したのである。（「來し方に例も有り難かりし」、「ゆく先に例も有り難からん」と云ふ可き所を一方省略したのである。）○騒（さわぎ）　騷動。此處は元弘頃の戰亂を指す。○恙なく　無事に。

○古代に　昔風に。古風で。

参考　○**あはれ**　ものに感動して發する語で、もとは「あゝ」と同じであるが、「あゝ」よりも廣く色々の意味に用ゐられ、凡て身に沁みて深く感ずる心持にいふ。場合に依つて善い意味、惡い意味、美しい意味、樂しい意、悲しい意、情ない意など種々に用ゐる。茲の本文の「あはれにも、山の端近く云々」の「あはれ」は「あゝ」「まあ」等といふ感嘆の意であり、「いと遥けき心地し侍る、あはれになむ」の「あはれ」は情ないと嘆息するの意である。又「もののあはれを知る」の「あはれ」は人をして感動させる情趣の意、「あはれを催す」の「あはれ」は憐憫の情の意である。○**なまめかし**　もとは若々しい、艶に美しいと云ふ意であるが、上品な、優美な、奥ゆかしいと云ふ意味にも用ゐる。「徒然草」の「すべて神の社（やしろ）こそ、捨てがたくなまめかしきものなれや」の「なまめかし」も奥ゆかしいの意。○**まうづ**　「至る」又は「來る」の敬語で、參る。參上する。特に神社や寺院へ參詣するの意に用ゐる。（「まうづ」は參出（まゐいづ）の音便で、「まうず」ではない。）○**年のつもりにや**　「年のつもりにやあらむ」の「あらむ」が省略せられてゐる。「つもり」は「積る」と云ふ動詞の連用形から轉成した名詞。「に」は卷頭の「御かたみのむつまじさに」の「に」と同じく、「の故に」「の爲に」の意。「や」は疑問の助詞。○**いさ**　どうであらうか。どうだか。下に必ず「知らず」と云ふ意の言葉が來る。「百人一首」の「人はいさ心も知らず故郷は花ぞ昔の香に匂ひけり」の如き其の適例である。（「いざ」と混同してはならぬ。「いざ」は「いざ行かむ」等の如く、人を誘ふ時、又は自ら心が進んで事を爲さうとする時に發する語。）○思ひ**給へ**わかれぬ

思ひ分ける事が出來ぬ。この「給へ」は自分の言語動作に添へて、詞を丁寧にする語である。「給ふ」には、四段活（は、ひ、ふ、ふ、へ、へ）と下二段活（へ、へ、ふ、ふる、ふれ、へよ）とがある。四段活の「給ふ」は他人の言語動作を敬ひ、下二段活の「給ふ」は自己の言語動作を丁寧にする。次の段に「思ひ給ふる」とあるのも下二段活である。〇**やむごとなし**　止事無しと云ふ事で、「打ち捨てて置けない」と云ふ意であるが、轉じて「此上もない」、「大變に貴い」、「おそれ多い」と云ふ意に多く用ゐる。〇**みやびやか**　上品な、優雅な、風流な。（みやびやか）は「みやびか」とも云ふ。「みやび」が語幹である。「みやび」は「みやぶ」の連用形で、都風の意で、田舎風（鄙ぶ）の反對の意。

四　筆者老尼に昔物語を請ふ

年の程など聞くも、珍らしき心地して、かゝる人こそ、昔物語もすなれ、と思ひ出でられて、まめやかに語らひつゝ、「昔の事聞かまほしきまゝに、年の積りたらむ人もがなと、思ひ給ふるに、嬉しきわざかな。少しのたまはせよ。おのづから、古き歌など書き置きたる物の片はし見るだに、その世にあへる心地するぞかし。」と言へば、すげみたる口うち微笑みて、「いかでか聞えむ。若かりし世に見聞侍りし事は、こゝらの年頃に、ぬば玉の夢ばかりだに無く、おぼゝれて、何のわきまへか侍らむ。」とは言ひながら、けしうはあらず、あへなむと思へる氣色なれば、いよ〳〵言ひはやして、「かの雲林院の菩提講に參りあへり